二〇一九年度 埼玉県公立高校入試問題

五〇分
一〇〇点

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

> 怪我(けが)で野球を続けられなくなった、元エースの立石大河(たていしたいが)は、甲子園を目指すチームメイトを応援するため、吹奏楽部の不破瑛太郎(ふわえいたろう)に協力を願い出た。吹奏楽部は現在、テレビのドキュメンタリー番組で密着取材を受けている。

「立石！　匿(かくま)って！」

四時半過ぎに、①<u>不破が部室に駆け込んできた。</u>グラウンドでは練習が始まっており、大河は部室で昨日の応援の反省点をまとめていたところだった。部室のドアを閉め、不破はサックスを抱えたままその場にへたり込んだ。

「……何が起こった？」

もの凄(すご)く悪い予感がしてそう聞くと、不破はばつが悪そうな顔で頭を掻(か)いた。

「四回戦の応援に駆けつけるべく、顧問の三好(みよし)先生に公欠を出してくれないかって頼んだ。」

「駄目だって言われたのか？」

「いや、それが思いの外すんなりとＯＫが出て、無事四回戦には行けることになった。」

「じゃあ、なんで逃げてきたんだ。」

「日曜に吹奏楽部の練習をサボって野球応援に行き、しかも明後日も行こうとしていることが他の部員にばれた。」

むしろ、よく今日までばれなかったものだ。

「それで、みんなに怒られたのか？」

「主に宮地（みやじ）が怒ってる。だから逃げてきた。」

ゲンナリという顔で、不破が窓辺の長机へと移動する。ここ数日、そこが彼の定位置になっていた。

「頼む、しばらく匿ってくれ。俺は大人しく練習してるから。」

「まあ、いいけど。」

ここで練習する時点で《大人しく》ではないんじゃないか。案の定、不破がサックスを吹き始めた直後、部室のドアがノックされた。

大河と不破が息を殺してドアを見つめると、「入りますよ。」という声と共に、ドアが開く。

入ってきたのは、眼鏡を掛けた三十代くらいの男だった。黒いTシャツにジーンズという格好で、手にはビデオカメラを持っている。

黒光りするレンズが、ぎろりと大河を捉えた。

「げっ、森崎（もりさき）さんだ。」

不破の声に、森崎さんと呼ばれた男性は「げっ、とは何だ。げっ、とは。」と笑った。

「全く。宮地君だけじゃなくて僕まで撒（ま）くとは、やってくれるねえ、瑛太郎君。」

「だって、宮地がキレたときの森崎さん、獲物を見つけた猛獣の顔してたから。」

一回り以上年上の男を指さし、②不破は仏頂面（ぶっちょうづら）をする。森崎さんとやらはそれを吹き飛ばすように軽快に笑った。

「そりゃあ、これでもドキュメンタリーを作ってる人間だからね、これは逃しちゃ駄目だって思ったんだ。」

その口振りに不破が溜（た）め息をつき、大河をちらりと見た。

「立石、この人、日東（にっとう）テレビの森崎さん。」

森崎さんが大河に向かって「突然ごめんなさい。」と頭を下げる。大河も椅子から腰を上げ、「こんにちは！」と勢いよく挨拶した。不破が今度は大河のことを森崎さんに紹介する。

「じゃあ、今回の騒動の中心人物ってわけか。」

「……そんなに大事になってるんですか？」

「そりゃあ、全日本コンクールを目指す吹奏楽部の部長が、地区大会を前に突然練習をサボって野球応援に行き始めたらね。」

③ごくり、と大河は生唾を飲み込んだ。カメラのレンズが自分に向いている。心臓のあたりに、張り詰めたような緊張が走る。不破の奴（やつ）、なんでこの状況で普通に振る舞えるんだ。

「瑛太郎君、そんなに野球好きだったの？」

　森崎さんが不破に聞く。

「君は、コンクールに向かって真っ直（す）ぐに突っ走ってるもんだと思ってたから、正直今回のことは僕も驚いたよ。」

「別に、俺はいつだって全日本で金賞獲（と）りたいって思ってますよ。日曜にサボった分、家でめちゃくちゃ練習したんですからね？」

　机の上で足を揺らしながら、不破は答えた。

「野球応援もコンクールのためだし、自分のためだし、寄り道をしてるつもりはないです。」

　不破がさらに言葉を続けようとしたとき、落雷みたいな音を立てて部室のドアが開いた。

「やっぱりここにいた！」

　怒り心頭という顔の宮地が、不破、大河、森崎さんと順番に視線をやり、深々と溜め息をつく。その後ろには副部長の徳村（とくむら）もいた。困った顔で笑いながら、大河に会釈（えしゃく）してくる。

「瑛太郎、お前、本気で明後日の野球応援に行くつもりか。」

　怒鳴り声を必死に押さえつけるようにして、宮地が言う。

「その次もその次も……野球部が甲子園に行くってなったら、甲子園まで応援に行くのか？　もし県大会と甲子園の試合が被（かぶ）ったら？　途中で放り出すかもしれないものに協力するなんて、無責任だと思わないか。」

　詰問（きつもん）する宮地に、徳村が「まあまあ。」とやんわり間に入る。でも、宮地は続けた。

「地区大会直前の大事な時期に部長が野球応援なんてやってて、一、二年がどう感じると思う？　部長なんだから部長らしく……。」

　宮地の言葉を、ぎしり、と木材が軋（きし）む音が遮った。

　部室に黒い影が差した気がしてそちらに目をやると、不破が長机の上に仁王立ちしていた。その目は凄く静かなのだけれど、深いところで怒りに燃えている。

「俺も自分がやってることを正しいだなんてちーっとも思ってないけど、それを立石の前で『野球応援なんて』って言うのは違うんじゃないのか？　それは、真面目に、本気で、仲間を応援してる奴に対する※冒瀆(ぼうとく)だ。」

不破の声に怒りは滲(にじ)んでいない。どちらかというと――ソロパートを高らかに歌い上げているようだった。ドキュメンタリーで見た、誰もいない朝の音楽室でサックスを演奏する彼自身みたいに。

「まあ、確かに、日曜の練習をサボったことはどう考えても俺が悪い。明後日の四回戦、公欠まで取って行こうとしてるのをどう思われようと、陰口叩(たた)かれようと、俺が悪い。土下座しろっていうなら土下座でも何でもする。でも、宮地は応援のせいで俺の演奏が下手になったと思うのか？　手を抜いていると思うか？　俺は、野球部が勝つ限り演奏しに行くぞ。一人でもな！　そんでもって全日本にも行くぞ。ゴールド金賞獲りにな！」

ぎしり。長机が鳴って、揺れる。微(かす)かな振動に、彼のサックスが光った。窓から差す夏の日差しに、呼吸でもするように、きらりと。

「大体、俺達の演奏を求めている人がいるのに、それに応えもしないで何がコンクールだ。そんな音楽のどこが美しい。」

《美しい》という言葉に、大河の心臓がどきりと跳ねた。そんな言葉を恥ずかしげもなく吐ける奴、こいつ以外にどこにいるんだろう。

「そういうわけだから。」

宮地に、そして大河にそう言って、「ははっ！」と笑って、不破は背後の窓から外へ飛び降りた。「じゃ！」と手を振って、そのまま逃亡する。

「コラーっ、えーたろー！　逃げるなー！」

窓に駆け寄った宮地が叫ぶ。そのまま、「呆(あき)れた！」と彼は長机の上に突っ伏した。

「あの吹奏楽バカっ！」

机の天板を掌(てのひら)で数回、ばん、ばん、と叩いた宮地は、そのまま溜め息をつく。地の果てまで轟(とどろ)きそうな、盛大な溜め息を。

「やってくれたなあ、立石。」

顔を上げた宮地が、大河を見た。

「よくも、吹奏楽部を動かす一番手っ取り早い方法を見つけたもんだ。」

④憤(いきどお)った声とは裏腹に、宮地の顔はそこまで怒っていなかった。むしろ、笑いを噛(か)み殺しているようにさえ見えた。

「それって、宮地達もスタンドで演奏してくれるってこと?」

恐る恐る、そう聞く。宮地は「今まで何聞いてたの。」という顔で、眉間に皺(しわ)を寄せた。背後では徳村が応援の手引きを広げ、「三日で何とかなるかなあ?」なんて呟(つぶや)いている。

「瑛太郎を動かしたってことは、そういうことなんだよ。」

大河に歩み寄った宮地が、腕を組んで唇を尖(とが)らせる。

「野球部だって、どんなピンチでもエースが諦めなければみんな頑張れるだろ?　エースが必死に練習してたら、『俺達も練習しなきゃ』って思うだろ?　瑛太郎は俺達にとってのエースピッチャーなの。どんなにコンディションの悪い日だって、あいつが笑ってステージに出ていくなら、俺達は大丈夫なんだ。」

一言一言、大河に叩きつけるようにして。

「瑛太郎がやるなら、やりたくなる。瑛太郎ができるって言うなら、できる気がしてくる。だから、やってやるよ。」

大河からぷいっと目を逸(そ)らし、宮地は応援の手引きを引っ摑(つか)んだ。「これのコピー、五十部作るぞ。」と徳村に言って、部室を出て行く。

まるで激しい嵐が少しずつ過ぎ去っていくようで、大河は慌てて部室を飛び出した。

「宮地!」

大河の声に、宮地は振り返ってくれた。

「演奏、楽しみにしてる。よろしくお願いします!」

声を張ると、「ああ、よろしくな。」という、素っ気ないようなそうでもないような返事がきて、大河は思わず頬を綻ばせた。

そんな自分の横顔を、森崎さんの構えたカメラがしっかりと映していた。

（額賀(ぬかが)　澪(みお)「ジョックロックに笑え」より。一部省略がある。）

（注）　※冒瀆(ぼうとく)……神聖・尊厳なものをおかしけがすこと。

問1　①不破が部室に駆け込んできた。とありますが、不破が部室に駆け込んできた理由を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　みんなと練習するよりも、一人の方が効率よく練習できると考えたから。
イ　いつものように大河と話をすることで、平常心を取り戻したかったから。
ウ　今まで隠していたことが明るみになり、吹奏楽部の練習に居づらくなったから。
エ　部活動が始まる前に、どうしても伝えなくてはならないことがあったから。

問2　②不破は仏頂面をする。とありますが、これは不破のどのような様子を表していますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　これから部員たちをどのように説得したらよいのか、途方に暮れている様子。
イ　テレビ局員にどこまでもしつこく追いかけられ、不機嫌になっている様子。
ウ　年上の人物に対して、言いたいことをついに言えたと得意になっている様子。
エ　自分に対して、批判を浴びせる部員たちから逃げ続けることに疲れている様子。

問3　③ごくり、と大河は生唾を飲み込んだ。とありますが、このときの大河の様子を次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、十五字以上、二十五字以内で書きなさい。

森崎さんに、騒動の中心人物だと言われただけではなく、

様子。

問4　④憤った声とは裏腹に、宮地の顔はそこまで怒っていなかった。とありますが、ここから、宮地のどのような心情の変化がわかりますか。次の空欄にあてはまる内容を、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

はじめは、瑛太郎の行動に対して

という気持ちに変化した。

問5　本文の表現について述べたものとして**適切でないもの**を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア「よく今日までばれなかったものだ」「ここで練習する時点で《大人しく》ではないんじゃないか」のように、大河の心情が会話以外においても表現されている。

イ「大河をちらりと見た」「大河からぷいっと目を逸(そ)らし」のように、擬態語を用いることによって、登場人物の様子や心情が印象的に表現されている。

ウ「ソロパートを高らかに歌い上げているようだった。ドキュメンタリーで見た、誰もいない朝の音楽室でサックスを演奏する彼自身みたいに。」のように、比喩と倒置が効果的に用いられている。

エ「大河の声に、宮地は振り返ってくれた」のように、回想の場面を挿入することで、大河と宮地の関係性が次第に変わっていったことが象徴的に表現されている。

二

次の各問いに答えなさい。

問1　次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。

(1) 至福の時間を過ごす。

(2) 晩鐘が鳴り響く。

(3) 毎日怠けずに練習する。

(4) 改革のコンカンをなす。

(5) 無限の可能性をヒめる。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
		けず		める

問２　次のア～オの中から、受け身の意味（用法）で用いられている助動詞を二つ選び、その記号を書きなさい。

来週の日曜日、市民ホールで、地元出身のピアニストのコンサートが開催さ<u>ア れる</u>。情感が満ちあふ<u>イ れる</u>彼女の演奏を聴くと、自分の幼い頃が思い出さ<u>ウ れる</u>。そして、いつも涙がはらはらと頬を伝って流<u>エ れる</u>。有名なコンクールで最優秀賞を受賞した功績をたたえ、近々、彼女に市民栄誉賞が授与さ<u>オ れる</u>ようだ。

□ と □

問３　次の文の――部と同じ意味を表す四字熟語として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

彼が直面している課題は、<u>ほんの少しの間</u>に解決できるような易しいものではない。

ア　一朝一夕　　イ　縦横無尽　　ウ　深謀遠慮　　エ　日進月歩

□

問４　次は、埼玉県に住む中学生のＡさんの学級で、【新聞の投書記事】をもとに、話し合いを行っている様子です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【新聞の投書記事】

「お客さん」としてだけでなく

中学生　埼玉花子
（埼玉県　13）

私の住む埼玉県では、２０１９年にラグビーワールドカップの３試合が、翌年には東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会の一部が開催される予定だ。どちらも観戦に行ってみたいのはもちろんだが、ボランティアとして関わってみることにも興味がある。

大会ボランティアについて調べてみると、主な対象は18歳以上であった。小中学生については、親子での参加や他の地域の活動も参考にしつつ、取り組みを検討していくとなっていた。

中学生に参加可能なボランティアの数は少ないかもしれない。だが、世界的なビッグイベントが身近な地域で行われる。せっかくだから、「お客さん」以外の形でも関われたらうれしい。私でも何かできることはないか、今後も調べていきたいと思う。

話し合いの様子

司　会「今日は、この投書記事について話し合います。意見や感想があったら話してください。」

Ａさん「私は、この投書記事と同じように、ボランティアに関わることに興味はありますが、そもそも、そういった大きなスポーツイベントで中学生にも参加できることはあるのでしょうか。」

Ｂさん「私も、中学生が参加するのは難しいと思います。投書記事にあるように、中学生にできる活動はあまりないだろうし、勉強や部活動もあるので時間的にも難しいからです。」

司　会「中学生にはボランティアへの参加は難しいのではないかという意見ですが、他の意見はありますか。」

Cさん「はい。投書記事に書かれているように、［Ｉ］のだから、何かお手伝いのようなことでもいいのでやってみたいと思います。活動の中身については、大人と同じようにとはいかないかもしれませんが、取り組めることはあるのではないでしょうか。」

Dさん「私もその意見に賛成です。ボランティアにはいろいろなものがあります。活動に参加してみたら意外とできた、というものもたくさんあると思います。様々なボランティアをやってみることが大切なのではないでしょうか。」

司　会「つまり、まずは中学生でもできるようなボランティアに挑戦してみよう、ということですね。」

Cさん「ボランティアには、道案内をしたり環境美化を行ったりするものもあると聞いたことがあります。」

Aさん「ボランティアにはどんなものがあるのか知りたくなりました。現在、行われているものについて、調べてみるというのはどうでしょうか。」

司　会「では、中学生も参加しているボランティアについて、調べて紹介するということでよいでしょうか。」

(1)【新聞の投書記事】と話し合いの内容をふまえて、Cさんの発言の空欄［Ｉ］にあてはまる言葉を、【新聞の投書記事】から十字で書き抜きなさい。

(2) つまり、まずは中学生でもできるようなボランティアに挑戦してみよう、ということですね。とありますが、この司会の発言は、話し合いの中でどのような役割を果たしていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　考えの理由を明確にする役割。

イ　出された発言の内容をまとめる役割。

ウ　他に意見はないか求める役割。

エ　話し合いの目的を確認する役割。

［　　］

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

食事にはマナーがある。とはいえ、よく知られているように、文化に応じてそのディテール※は多様であり、しかも対立することも多い。食器をもっていいか、音をたてていいか、会話すべきか等々、際限ない。

重要なのは、マナーの具体的内容ではない。それぞれの文化において、複数のひとびとのあいだで、何がよくて何が悪いかということがすでにある。それは、複数のひとびとが、互いの行為を見あい、聞きあい、触れあっているということからくる事実である。

一人で食事をする場合、一切のマナーを無視して食べているひともいるかもしれない。ひとと一緒に食べる場合、食べる量や速度を他のひとにあわせなければならない分、①<u>それで気苦労は増える。</u>一定量の食料しかないとき、ひとは分けあわざるを得ないわけだが、だれがどれだけを取るか――そこには、さらに緊張が走る。

ケモノたちのように食料を巡って闘争するのは、全員にとって不利益である。勝ったものが一人で多く食べるにせよ、急いで用心しながら食べるため、満足度はその量には比例しないだろう。適切に分配されれば安心感があって、量が多かっただけよりも満足度は大きいだろう。一緒に食べる場合に量や速度をあわせることは、安心を増やし、気遣いを減らす。

②<u>正しいマナーを教えようとするひとは、マナーを知らないひとや、マナーを修正しようとしないひとにもまして避けるべきである。</u>そのようなひとは、マナーを語る際のマナーを知らない――マナーの正しさは、ルールの正しさとは異なるのである。

なるほどそのひとの教えは、マナーを知って相手に失礼のないようにしようという姿勢のひとには役に立つと思われようが、そもそもそうした知識によって失礼がないようにすることができると考えること自体が失礼である。

マナーは、ただひとの真似（まね）をするようなものではないし、覚えておいて自分がセレブであるかのように見せかけるためのものでもない。マナーとは、理由はともあれ、その場で相手のやり方にあわせようとすることなのであって、文化が異なれば相手のマナーも異なることを互いに前提して伝えあおうとするコミュニケーションのことでもある。

重要なのは、マナーをルールとして覚えることではなく、マナーの違うひとをマナーが乏しいひとと取り違えないようにすることである。マナーが乏しいひとは、自分のマナーばかりに執着するひとと同様、一緒に生活や仕事のできないひとであるから遠ざかった方がよ

いが、マナーが異なっていても、それをみずから修正しようとするひととなら、かえって愉快な生活や創造的な仕事ができるだろう。

特定のマナーを知っているかどうかは二義的であり、マナーをもっており、かつ相手のマナーがあることも尊重して、それにあわせようとすることが最大のマナーなのである。

したがって、徳はマナーにある。マナーの基準は美醜である。「汚いこと」はしたくないように、正義は美しく不正は醜い。したがって、マナーというものは、それにのっとっていないひとがいたとしても、そのようなひとを非難するようなものではなく、「ノーブレス・オブリッジ（高貴なひとの義務）」として、むしろのっとっているひとを賞賛すべきものなのである。

たとえば、対向車や周囲の車の動きを微妙に感じとりながら、危険を回避しつつ澱（よど）みなく運転するということをしないひとは、マナーがないというよりは、車を運転する周囲のひとへの感受性や、そのひとたちの運転の仕方にあわせる技量がないのである。マナーの欠如は、マナーの否定や無視ということではなく、感受性や技量が不足しているともいえる。

それでも、それを「見える化」して、すべてルールとして明快に規定せよと主張するひとも出てくるであろう。そのことは、自動車が道路の左側を通行すべきであるとされるようなものである。それは道路交通法という「ルール」によるものではないかと思われるであろうが、そもそもどちらかに決めておかないと自動車は正面衝突してしまう。江戸時代、武士が刀の鞘（さや）がふれあわないようにと左側通行をしていたマナーのように、その意味では、道路交通法は、マナーを明文化したものであるといえる。

しかし、③<u>一旦ルールが決まったとなると、別のことがはじまってしまう。</u>

シルバーシートが設定されて以来、「年寄りはシルバーシートに行け」という若者や、「若者はシルバーシートに座るな」という年寄りが出てきた。そのわけは、それがルールと解されたからであって、「ルールに反していること」が気になるようになるとともに、ルールに反しても構わないと考えているひとがいるという想像だけで、怒りという別の情念が生じるようになったからである。

そのような情念は、体の弱いひとには席を譲ろうという、従来のマナーには伴ってはいなかったはずである。マナーに反するひとへの、ただマナーに反しているからという怒りは理不尽であり、そこには［　I　］。

ルール化されたマナーは、マナーとはあきらかに異なっている。ひととおなじようにしていれば、食物を得られたり、危険を避けたりすることができることが多いのだが、ルールとなればその利害損得を考えはじめ、その瞬間に、そのひとはマナーを外れてしまう。それ

は、ちょうど、善をなしたひとが、それを口に出した瞬間に「偽善」、すなわちひとから評価されるためにそれをしたということになってしまうのと同様である。

さらには、たとえばトイレに行列を作るというルールが定められたとしたら、それは、割り込みをすれば他のひとよりも早くトイレが使えるという新たな行動を可能にする。ルールが言葉で明確にされた分、その反対のことも明確にされてしまい、マナーとしてはなすべきではなかったことをしようとするひとたちが出現する。

「ルールは破るためにある」というひともいるように、ルールができれば抜け道を探すひと、そのグレーゾーンを活用するひとが出てくるし、そのルールを前提に新たな行為を企てようとするひとも出てくる。それを避けるためにあえて表現の曖昧なルールが定められるとすれば、それはどんな行為なのかの解釈が分かれ、いよいよ他のひとに、それぞれの都合や心情で、非難したりしなかったりするという、想定外の行為を生みだしてしまう。

④<u>ルールとは、厳密に定義しようと、あえて曖昧に定義しようと、必ず弊害が生じるという扱いにくいものなのである。</u>

そのわけは、ほかでもない。ルールが言葉で制定されるからである。ルールは、マナーのように曖昧だったり内容が変動したりしないように、言葉によって明示されるが、その明示のための言語のルールが別途にあって、それで二重化されてしまう。言葉によってたてられたルールは、言葉の適用についてのルールによって、もはや、単にマナーを明示したものではなくなってしまうからなのである。

（船木(ふなき)　亨(とおる)「現代思想講義」より。一部省略がある。）

（注）※ディテール……詳細。細部。

問1　①それで気苦労は増える。とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　配分を平等にするか、条件によって不平等にするかということに、苦心するから。
イ　一緒に食べる相手が何を食べているのかが気になって、安心感を得られないから。
ウ　マナーは個人によって様々なものであるので、相手を満足させることは難しいから。
エ　食べる量や速度について、一人で食べる場合よりも気を遣わなくてはならないから。

□

問2　②正しいマナーを教えようとするひとは、マナーを知らないひとや、マナーを修正しようとしないひとにもまして避けるべきである。とありますが、これは、筆者がマナーをどのようなものだと考えているからですか。次の空欄にあてはまる内容を、三十五字以上、四十五字以内で書きなさい。

マナーにおいて大切なことは、□□□ことであり、決まりきったマナーは存在しない、と筆者は考えているから。

問3　③一旦ルールが決まったとなると、別のことがはじまってしまう。とありますが、ここでの「別のこと」にあてはまらないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　マナーのときには伴うことのなかった別の情念が生じてくること。
イ　損得によって行動することで、もはやマナーではなくなること。
ウ　ルールとは反対の内容についても、意図せずに明らかになること。
エ　ルールを守るための行動が非難され、想定外の行為を生みだすこと。

問4　本文中の空欄 Ⅰ にあてはまる内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　ルールとマナーの混同がある
イ　ルールとマナーの区別がある
ウ　ルールの基準が存在する
エ　マナーの基準が存在する

問5　④ルールとは、厳密に定義しようと、あえて曖昧に定義しようと、必ず弊害が生じるという扱いにくいものなのである。とありますが、筆者は、ルールについてなぜ扱いにくいものだと考えていますか。次の空欄にあてはまる内容を、**解釈**、**二重化**の二つの言葉を使って、四十五字以上、五十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。

ルールは、言葉によって定められることで、□□□という弊害が生じるから。

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（----の左側は口語訳です。）

近ごろの歌仙（和歌の名人）には、民部卿定家（みんぶきやうていか）、宮内卿家隆（くないきやういへたか）とて、一双にいはれけり。そのころ、「われも、われも。」とたしなむ人多けれど、いづれも、この二人には及ばざりけり。

ある時、後京極摂政（ごきやうごくのせつしやう）、宮内卿を召して、「この世に歌詠（うたよ）みに多く聞ゆるなかに、いづれか勝れたる。心に思はむやう、ありのままにのたまへ（お話しされよ）。」と御尋ねありけるに、「いづれも分きがたく。」と申して、思ふやうありけるを、「いかに、いかに。」と、あながちに（ひたすら）①問（と）はせ給（たま）ひければ、ふところより畳紙（たたうがみ）（畳んだ紙）を落して、やがて罷（まか）り出でける（そのまま退出した）を、②御覧ぜられければ、

　明けばまた秋のなかばも過ぎぬべし
　かたぶく月の惜しきのみかは

と書きたりけり。

これは民部卿の歌なり。かねて、③かかる御尋ねあるべしとは、いかでか知らむ（どうしてわかろう）。もとよりおもしろくて、書きて持たれたりけるなめり。

これら④用意深きたぐひなり。

（「十訓抄（じっきんしょう）」より）

問1 ①問はせ給ひければとありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、**すべてひらがなで**書きなさい。

問2 ②御覧ぜられければとありますが、この主語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 民部卿定家　イ 宮内卿家隆　ウ 後京極摂政　エ 作者

問3 ③かかる御尋ねは「このようなお尋ね」という意味ですが、ここではどのようなことを尋ねたのですか。次の空欄にあてはまる内容を、十五字以内で書きなさい。

□□□□□□□□□□□□□□□ ということ。

問4 ④用意深きたぐひとありますが、これは、宮内卿家隆のどのような行為に対して述べたものですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 事前に書いて持っていた自分の歌を、目につくように落とした行為。

イ 素晴らしいと思っていた歌を、紙に書いて持ち歩いていた行為。

ウ 覚えていた民部卿定家の歌を、すぐさま詠んで披露した行為。

エ 答える代わりとして、即座に歌を紙に書いて差し出した行為。

五

下の資料は、「読書量（マンガや雑誌を除く）」について、県内の小学生、中学生、高校生を対象に調査し、その結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「読書を推進するための取り組み」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。次の（注意）に従って、あなたの考えを書きなさい。

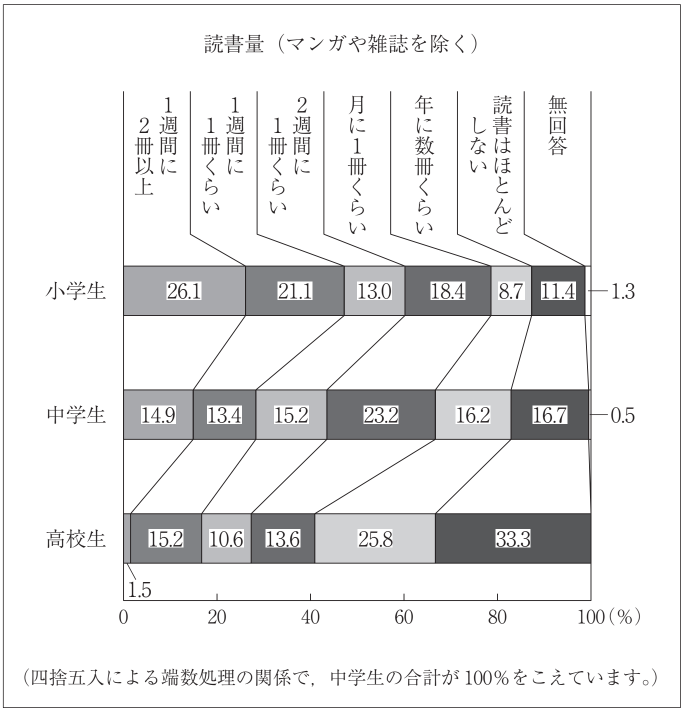
（注意）

(1) 段落や構成に注意して、自分の体験（見たこと聞いたことなども含む）をふまえて書くこと。

(2) 文章は、十三行以上、十五行以内で書くこと。

(3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

(4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。



『平成 28 年度「埼玉青少年の意識と行動調査」報告書』から作成

15　13

二〇一九年度　埼玉県公立高校入試問題

一

解答

問1、ウ　問2、イ　問3、(森崎さんに、騒動の中心人物だと言われただけではなく、)自分自身が撮られていることを意識し、緊張している(様子。)(24字)(同意可)　問4、(はじめは、瑛太郎の行動に対して)怒りを感じていたが、瑛太郎の思いに動かされ、野球の応援もやってやろう(という気持ちに変化した。)(34字)(同意可)　問5、エ

解説

問1、この後で不破は、「吹奏楽部の練習をサボって野球応援に」行っていることが「他の部員にばれた」ので「逃げてきた」と言っている。

問2、前の「げっ、森崎さんだ」という不破の言葉に着目する。逃げ込んだ野球部の部室にまで森崎が現れたことを不満に思っている。

問3、後の「カメラのレンズが自分に向いている…緊張が走る」に着目し、大河の様子をとらえる。

問4、吹奏楽部の練習をサボって野球部を応援していた瑛太郎に「怒り心頭」の宮地だったが、瑛太郎が「必死に」なって取り組んでいるのがわかって心境を変化させ、「瑛太郎がやるなら、やりたくなる」「やってやるよ」と言っている。瑛太郎の熱意に動かされた宮地が、吹奏楽部として野球部を応援しようと決意したことをおさえる。

問5、本文には「回想の場面」は挿入されていない。

二

解答

問1、(1) しふく　(2) ばんしょう　(3) なま(けず)　(4) 根幹　(5) 秘(める)　問2、ア(と)オ　問3、ア　問4、(1) 身近な地域で行われる　(2) イ

解説

問2、イは「満ちあふれる」という動詞の一部。ウは自発の助動詞「れる」。エは「流れる」という動詞の一部。
問3、イは自由自在に物事を行うさま。ウは先々のことまで考えて計画を立てること。エは絶えず進歩すること。
問4、(1) ボランティアに参加したい理由について「記事」では、「世界的なビッグイベントが身近な地域で行われる」せっかくの機会だから、と述べている。(2) CさんやDさんの「大人と同じようにとはいかないかもしれませんが、取り組めることはある」「様々なボランティアをやってみることが大切」という意見を、「つまり…ですね」と言ってまとめている。

三

解答

問1、エ　問2、(マナーにおいて大切なことは、)文化が異なれば相手のマナーも異なることが前提で、その場で相手のやり方にあわせようとする(ことであり、決まりきったマナーは存在しない、と筆者は考えているから。)(43字)(同意可)　問3、エ　問4、ア
問5、(ルールは、言葉によって定められることで、)言葉の適用についてのルールにより二重化され、厳密にするとルールの抜け道ができ、曖昧にすると解釈が分かれる(という弊害が生じるから。)(52字)(同意可)

解説

問1、「ひとと一緒に食べる場合、食べる量や速度を他のひとにあわせなければならない」ので、その分、気苦労が増えると述べている。
問2、後で「マナーとは、理由はともあれ…コミュニケーションのことでもある」「マナーをもっており、かつ…最大のマナーなのである」と述べている。マナーは文化によって様々で、そうした相手のマナーにあわせることが大切だという考えをおさえる。
問3、「ルールを守るための行動が非難され」るとは述べていない。
問4、シルバーシートが設定されたことで、「体の弱いひとには席を譲ろう」という「マナー」が、「ルール」に置き換えられてしまい、「理不尽」な感情が生まれるようになったことについて述べている。
問5、ルールは「言葉で制定される」ものなので「言葉の適用についてのルール」も重なり、「言葉で明確に」されることによってルールの「抜け道」も明確になってしまうという「弊害」や、それを避けようと「表現の曖昧なルール」にすると、今度は「解釈が

分かれ」てしまうという「弊害」が生じると述べている。

四

解答

問1、とわせたまいければ　問2、ウ　問3、どの歌詠みがすぐれているか(ということ。)(13字)(同意可)　問4、イ

解説

問1、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

問2、宮内卿が落とした「畳紙」を見た人物を考える。

問3、後京極摂政は宮内卿に「この世に歌詠みに…いづれか勝れたる」と尋ねている。

問4、宮内卿は「もとよりおもしろく」思っていた歌を「書きて持たれ」ていた、と述べている。

口語訳

近頃の和歌の名人として、民部卿定家、宮内卿家隆という二人が、双璧といわれていた。その頃、「われも、われも」と和歌をたしなむ人も多かったが、誰も、この二人には及ばなかった。

ある時、後京極摂政が、宮内卿を招いて、「今の世に歌詠みは多くいるが、誰が一番優れているか。心に思うことを、ありのままにお話しされよ」と尋ねなさったところ、「どの方も優劣をつけられません」と答えて、それでも心の中に思うことがあるようだったので、「さあ、さあ」と、ひたすらお尋ねなさったところ、宮内卿が懐から畳んだ紙を落として、そのまま退出したので、その紙を御覧になると、

　夜が明けると秋ももう半ばを過ぎてしまう。傾く月ばかりが惜しいわけではない

と書いてあった。

これは民部卿の歌であった。以前から、このような質問もあろうかと、どうしてわかろう。もともとすばらしい歌だと思って、紙に書いて持っていたのであろう。

これらのことは、用意周到であった例である。

五

解答

（例）

　資料から、高校生になるにしたがって読書量が落ちていることがわかる。

　私が通っていた小学校の図書館では「おすすめ図書」がいくつも掲示されていて、本に対する関心が持てるような取り組みをしていた。私自身もこの取り組みのおかげで、すばらしい本と出会うことができ、読書好きになった。中学生や高校生になり、部活動や勉強が忙しくなっても、本への興味を失わないように、面白い本の情報を生徒に広く知らせていく取り組みが大切なのだと思う。

解説

資料は、高校生になるにしたがって読書量が減っていることを示している。その原因をふまえた改善策を考えるとよい。